
■■日本世代間交流協会ニュースレター 2016年1月号■■

新春とはいえども、まだ厳しい寒さが続いております。皆さまいかがお過ごしでしょうか。定期刊行のニュースレター、1月号をお送り致します。

【目次】

1. 新年のご挨拶（杉会長より）
2. 活動報告
3. 活動予定
4. 出版物の案内
5. 「会員の声」
6. 「会員の声」募集
7. 次号（5月）の予定

【1. 杉会長より新年のご挨拶】

明けましておめでとうございます。

草野篤子前会長からバトンタッチをして行ってまいりました平成27年度事業も残すところ2か月となりました。昨年夏の「世代間交流コーディネーター養成講座」及び世代間交流をテーマに博士号を取得された理事、会員の方々の研究実践の成果を「世代間交流セミナー」と題して発表頂くことを平成27年度の活動の柱といたしました。

ここ数年の日本の少子高齢化の現状に目を転じますと、限界集落と言われていた過疎化が全国に広がり、若者も子どももいなくなりました。都市部では一人暮らし高齢者が増加し、高齢者の孤立化と孤独が広がっています。少子高齢化は、今後、加速度を増して人口減少社会に突入します。高齢化の進んだ団地を再生するプロジェクトも数多く、高齢者が生活し易い工夫がされております。リノベーションされた団地の高齢者にアンケートを取ったところ「部屋はバリアフリーで使いやすくなりました」「でも、外で子どもの声がしないのが何とも寂しいね」という声が多かったという事でした。

生活の便利さより、子どもや若者そして、人々とのかかわりを必要としているのです。

さて、日本は平成26年2月に、ようやく国連の「障がい者権利条約」に批准し施行されました。そして、本年4月「障害者差別解消法」も施行されます。障害を持つあらゆる人々と共に生きる、インクルーシブ社会の実現に向けた取り組みも始まります。世代間の交流は多世代のどのような人々にとっても幸せと思える社会の実現へとより広い理解と関わりの必要性へと変化しています。

今後、世代間交流の実践の重要性は増し、様々な地域や学校、福祉施設や保育園などで日常的に行われる機会が増えるものと考えられます。

平成28年度は特定非営利活動法人日本世代間交流協会発足10周年の節目の年を迎えます。

本年は、日本世代間交流協会の組織内と事業内容を強化し、以下の4つの柱で行ってまいります。

- 1) 世代間交流コーディネーター養成講座（初級・中級等）の民間資格化
- 2) 世代間交流コーディネーター養成講座の教科書・指導書（マニュアル）等の作成
- 3) 平成27年度までの養成講座受講者のフォローアップ研修会の開催
- 4) 世代間交流コーディネーター実践フォーラムの開催

これらの実現に向け検討し実践してまいります。

日本世代間交流協会が発展し、地域活性化の牽引役となりますよう、会員の皆様の参加と参画そして力強いご支援とご協力をお願い申し上げまして年頭のご挨拶といたします。

☆任意団体としての日本世代間交流協会の前身は、2003年暮れから“Joyful Generations”という研究会を組織し、月例会を重ねていきました。その後、研究会は日本世代間交流協会となり、2006年の早稲田大学での国際会議を開催できるまでに成長し、特定非営利法人日本世代間交流協会発足へと成長してきました。

【2. 活動報告】

■ 第2回 世代間交流セミナー ■

12月6日9:30～11:30に、山之口俊子先生（生きがい図書館プロジェクト主宰）をお招きして、「若い人の生きがいの創生に、加齢体験を生かす」をテーマにご講演をしていただきました。その時のレポートを、山之口先生が作成してくださいました。

すべての世代の「生きがい」創生に加齢体験を活かす ～山之口学位論文「高齢期 QOL 保持のための「生きがい喪失」対処に関する研究～より

【研究の目的】

すべての世代の人々は、それぞれの「物語」を持つ。
その物語は人生の記録であり、それらの個々の物語の分析から、幸せな人生を全うするために必要なことが浮かび上がる。それは、すべての世代にとって、人生の最大目標は「生きがい」の獲得であり、「生きがい」はその対象も価値も人それぞれであり、それは世代を超えて守り、守られ、尊重されるべきものであるということである。そして、「生きがい」とは、少子高齢社会といわれ、「国民総活躍社会」が政治目標でもある現代にあっては、世代間を超えてその交流の基本となるものである。

【当研究の基本姿勢】

- 「生きがい」の創生にあたっては、
- ・それぞれの立場の尊重（世代間交流の基本）
 - ・目標とする人間像の確立（古いも若きもそれぞれが互いに尊敬できる手本）
 - ・加齢の喜びを学ぶこと（“古い”への憧れ、楽しみを持つ）が必要となる。

【研究から見えてきた課題】

高齢社会の現代にあって、最大の課題は「認知症」である。
「認知症」は、「加齢」（積み重ねられた経験）の結果である。各世代が（とくに高齢世代）、自らの「物語」の中から見出したものは、当然の結果としての「加齢」、「認知能力の障害」である。

人間の成長過程を学び、その結果としての「加齢」を理解し、高齢者・認知症を病む人の社会貢献への意識を受け止める。高齢者が、主体となって地域を創っていくことを目指すなかで、その「促進可能性」とその一方で「阻害要因」を整理したい。

【本研究の主流となる概念】

○老年的超越＝全世代の理解
超高齢者人口の増加を背景に、スウェーデンの社会学者、ラルス・トルンスタムが提唱した発達理論。
物質的・合理的見かたから、より神秘的・超越的な見方に移行することで、人生の満足度が増すという考え方である。出来なくなるのを嘆くのではなく、出来なくなるのを自然なこととして受け止めて、できる事を楽しむことで、喪失の中で自分らしさを失わずに生きていく態度といえよう。プロダクティブ・エイジングが提唱された1980年代以降、高齢者を社会の主体として位置づける高齢者観は、広く国際的に定着している。

○世代間交流にみる、人生、物語の共有

長期化した高齢時代、高齢者の“余生”と呼ばれる時間の長さとその力へ寄せられる期待は大きい。そして、各世代が「自らの言葉」で語る時代の出現と相まって、少子高齢社会（高齢者と子どもという地域コミュニティと関わりの多い世代が増大）での、暮らしやすいまちづくりが求められる。社会を支えるマンパワーたる高齢者が、「社会的役割」を持って社会参加しているかの確認が重要である。

【現代社会の最大難問、認知症】

いまや、800万人を超えるとも言われる認知症患者の増加は、当事者ばかりでなく、そこに係るすべての世代の課題である。

○TWO-LAP BOOK という思想

「わたし 大好き」という絵本がある。（原題は「THE SUNSHINE ON MY FACE」）

身を寄せて座ったふたりの膝に乗せて読む本で、認知症の人のために、世界で初めて生まれた絵本である。

【現代のソーシャルキャピタル】私の図書館、地域の図書館（私の図書館、地域の図書館）

アフリカの諺に「老人が一人亡くなると、村の図書館が一つ消えるに等しい。高齢者は、過去と現在、そして未来を結ぶ仲介者である」というのがある。

行くあても なき老人は

図書館の 昨日の席に 新聞を読む

という新聞紙上に投稿された歌、これが日本の実情である。

【世代間交流の場としての図書館】

学校図書館が、特別に地域に公開されるケースもある。

また校区のシニア層の読み聞かせ活動も、児童書をはじめ、地域の歴史、体験談を通して知る戦争まで、広く深い学びの場となっている。

地域の公共図書館、企業の提供する図書館など、世代間の交流の幅は際限ない。さらにその活動も、読書に留まることなく、図書室を出た課外活動に発展することもある。

【終りに】

ロシアの昔話の中で、恐ろしい魔女の言うに「人間、ものをたくさん知れば知るほど、早く年を取るものじゃ」というのがる。今どき高齢者は、子どもの心を忘れない、若いお兄さんの悩みも共有できる。この手中に収めた知恵と若さという武器こそが、世代間交流の効用だろう。

■ 日本世代間交流学会 第5回全国大会 が開催されました ■

10月3日(土)、追手門学院大阪城スクエアにて日本世代間交流学会 第6回大会(テーマ「世代を超えて―世代間交流と死生観―」)が開催されました。今大会では、「世代を超えて―世代間交流と死生観―」をテーマに多くの協会の先生方が研究発表およびシンポジウムにご参加くださいました。本大会では、アルフォンス・デーケン先生(上智大学名誉教授)が「世代間交流と死生観」について基調講演をされました。デーケン先生は、ユーモアを交えながらもとても分かりやすく世代を超えた死との向き合い方についてお話をしてくださいました。午後からは、シンポジウムおよび自由研究発表が行われました。発表会場では、研究者・実践者間の“世代間交流”も至る所で見られ、多角的な視点から「世代間交流」についての理解がより深められた大会になりました。

■ 日本世代間交流学会が日本学術会議の協力学術研究団体に指定されました ■

2016年1月に日本世代間交流学会は、日本における全分野の科学者を代表する機関である「日本学術会議」より『協力学術研究団体』の指定を受けました。『協力学術研究団体』とは、日本学術会議と各団体との間で緊密な協力関係を持つことを目的として設けられたもので、指定されるためにはいくつかの要件を満たすことが規定されております。

【3 活動予定】

■ 第3回 世代間交流セミナー ■

2月6日に村上育子先生(トルコ アクデニズ大学文学部)による「トルコの世代間交流」に関する講演会が開催されます。村上先生は、トルコの大学で老年学を教えておられ、今回の講演会ではトルコでの世代間交流の現状と課題についてとても貴重なお話をしてくださいます。皆様、ふるってご参加くださいますようお願いいたします。

タイトル 村上育子先生来日講演「トルコの世代間交流」(仮)

―トルコでの異世代間交流の動向:全国各地の実践例から―

日時 2月6日(土) 18:30~20:30

場所 北沢タウンホール11階

世田谷区立男女共同参画センター「らぷらす」11階 研修室1

会費 無料（非会員のかたは500円）

☆ 詳細は、下記の HP をご覧下さい。

<http://www.jiua.org/20160206rainitikouen.pdf>

■ 第4回 世代間交流セミナー（予定） ■

3月13日（時間は未定）に「らぷらす研修室1」において村山陽先生（東京都健康長寿医療センター研究所）の博士論文をもとに「地域における世代間援助の現状と課題」を主題とした講演を企画しております。村山先生は、地域における世代間の助け合いがもたらす効果について、科学的に検証されており、今回の講演ではその成果について分かりやすくご説明をさせていただきます。皆様ふるってご参加ください。

☆ 詳細は、次の HP をご覧下さい。 <http://www.jiua.sactown.jp/>

【4 出版物の案内】

■ 『世代間交流—老いも若きも子どもも—』第15号、特定非営利活動法人日本世代間交流協会第8号 の発行 ■

皆様の、お手元に届いていますか。

現在、『世代間交流—老いも若きも子どもも—』第16号を編集中です。ご投稿くださいます方は、2月の10日までに、至急ご連絡ください。

当協会の定期刊行物であるこの機関誌は、国立国会図書館の定期刊行物の指定を受けております。

■ 地域を元気にする世代間交流 ■

倉岡正高 編著 草野篤子、藤原佳典、杉啓以子ほか著（公益財団法人社会教育協会）、（900円）

世代間交流の意義、研究方法および実践事例について、分かりやすく解説した入門書となっております。世代間交流の研究者や実践家がそれぞれ豊富な経験と蓄積された研究成果をもとに執筆いたしました。なるべく多くの方に読んで頂きたい1冊です。

■ 『人を結び、未来を拓く世代間交流—世代間交流の理論と実践シリーズ1』 ■

草野篤子・溝邊和成・内田勇人・安永正史・山之口俊子編著『人を結び、未来を拓く世代間交流—世代間交流の理論と実践シリーズ1』(三学出版) 2015年4月刊

2,268円

本書では、世代間交流学の確立に向けて、社会学、心理学、教育学など他分野の専門家により、それぞれの分野で行ってきた世代間交流に関する研究と実践を分かりやすくまとめられています。ぜひ、ご一読ください。

【5 「会員の声」】

「会員の声」ということで、皆さまにご応募を呼びかけています。皆様のご意見や体験談をニュースレターに掲載したいと思っておりますので、世代間交流について思うこと、当協会について感じる事など、ご意見を以下のアドレスにお寄せ下さい。

[yhoyho05\[at\]tmig.or.jp](mailto:yhoyho05[at]tmig.or.jp) ([at]を@に変更してください)

【6 その他】

「会員の声」ということで、皆さまにご応募を呼びかけています。皆様のご意見や体験談・エッセー・詩・俳句などを、ニュースレターに掲載したいと思っておりますので、世代間交流について思うこと、当協会について感じる事など、どのようなことでも結構ですので、ご意見を以下のアドレスにお寄せ下さい。本号では杉啓以子会長、草野篤子前会長、小笹奨先生(川崎市立犬蔵小学校)、安永正史先生(東京都健康長寿医療センター研究所)、高橋知也先生(東京都健康長寿医療センター研究所)、山之口俊子先生(生きがい図書館プロジェクト主宰)のご協力のもとで、原稿及び資料写真を収集することができました。心より感謝申し上げます。今後ともご協力のほど、どうぞよろしくお願いたします。

【7 次号（5月）の予定】

1. 活動報告
2. 活動予定
3. 会員の声
4. その他

【編集後記】

今月のニュースレターは、いかがでしたでしょうか。
次号も、どうぞよろしく願いいたします。

ご返信は、[yhoyho05\[at\]tmig.or.jp](mailto:yhoyho05[at]tmig.or.jp) ([at]を@に変更してください) にお願
います